

北九州市地域福祉計画推進懇話会(第4回) 会議要旨

1 開催日時 平成29年1月12日(木) 18:30~20:45

2 開催場所 北九州市役所 3階 大集会室

3 出席者

(1) 構成員

村山座長、石丸構成員、磯田構成員、占部構成員、角見構成員、城田構成員、徳丸構成員、中間構成員、中村構成員、西村構成員、芳賀構成員、眞鍋構成員、渡邊構成員

(2) 取り組み事例発表者

北九州市ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」センター長 田中氏

暮らしの保健室「こみねこハウス」代表 杉本氏

(一社)「ソシオファンド北九州」共同代表理事 菅氏

(3) 事務局

保健福祉局長、保健福祉局地域福祉部長、地域福祉推進課長、地域支援担当課長ほか

4 会議内容

(1) 地域の取り組み

①北九州市ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」の取組(資料1)

②暮らしの保健室「こみねこハウス」の取組(資料2)

③(一社)「ソシオファンド北九州」の取組(資料3)

(2) 施策ごとの課題、強化すべき取組について(資料4)

5 会議経過及び発言内容

座長

- ・本日は、構成員以外の3名の方をお招きしている。それぞれの取り組みをご紹介いただいた後にまとめて質疑、意見交換を行う。

田中氏

- ・ひきこもり地域支援センター「ステップ」の取り組みを紹介させていただく。
- ・当センターに初めて来られる方に渡すパンフレットのタイトルを「引きこもり支援から新たな地域づくりを目指して」としており、これが今最も力を入れなければいけないと実感している取り組みである。
- ・私どもは、不登校の問題を中心に市民で考える場を作りたいという思いから1991年1月に市民活動団体として3名でスタートしたが、学齢期を過ぎた年代でも次のステップに踏み出せないまま、自宅に止まっている本人や親の悩みを聞くことが増えてきて、16年目で不登校の年代の悩みを中心に語るグループ、その年代を過ぎた成人が社会との繋がりをどうしたらいいのか考えるグループ、それらの活動をサポートし、発信する事務局的な役割のグループの3つに分割し、新たに「ステップ北九州」と命名した。

- ・1991年から数えると四半世紀を超える活動になった。その割にできていることは非常に乏しいものではあるが、市民自らその問題を自分たちの問題として一緒に考えていくところが、私たちの財産になってきた。
- ・全国で15歳から39歳の方を対象に実施したアンケートによると、引きこもり体験者の推計が54万人であると毎日新聞が掲載していた。北九州市においては、2009年の統計によると、この年代の約5,000人が、この問題で悩んでいると推計されていた。
- ・今回の調査では7年以上ひきこもる方が35%もあり、これから40代以上のひきこもり経験者を抱える家庭の悩みは非常に深刻であり、また早急な対応が求められる課題である。
- ・40代以上の方々の相談は、年々寄せられているが、せつかく来られた方に最初に何を提案できるか非常に悩ましい。相談者が画期的な変化を期待するのではなくても、「どうせ言ってもダメだろう」とあきらめてしまわないで済み、自分も支援にのれる可能性があること実感してもらえる手だてが必要だと考えている。
- ・40代以上の方があきらめてしまいやすい条件の1つが、両親の高齢化である。80代以上の両親が40代・50代のひきこもり当事者の生活の支援をしている。そういった中で、希望を失わずに次の支援に繋げていくには、どのような方法があるのか、頭を悩ましてきた。
- ・まったく希望がないわけではない。長年、市民の力を寄せ集めて、子どもや若者の希望を考えてきた中で、私たちの1番大きな力に成りえたものは、市民同士の支えあいである。公的な支援に乗れない間に希望を失わないで済むような、同じ地域に住む仲間意識や支えあい、こういったものを有効な形で活かしていく知恵が今、必要とされている。公的支援に繋がりにくい方々にも地域の手が届く機会を提供できる、そういったインフォーマルな支援ネットワークを推進したい。
- ・そのような支えあう地域づくりが実現することによって、ひきこもりの問題だけではなく、1人暮らしの高齢者、1人親家庭、若い親の家庭といった社会の手の届きにくい方々の希望に繋がる可能性が高まる。
- ・これまでの取り組みとしては、「縁が輪ネットワーク」の会員登録者の発掘と交流であり、現在約60名の市民ボランティアが、高卒認定試験の希望者に対する学習支援、就労体験の受け入れ先の開拓、合唱・写真・イラスト・そば打ちなどの各部活動などを指導いただく顧問としての役割を担っている。
- ・また、八幡東区の多世代農園で農業体験を実施しており、活動を通じて地域の中で顔見知りの人が増えていくと、「自分もこの地域だったら新しい人間関係に踏み出せそうだ」という安心感が生まれている。
- ・また市内の障害者や高齢者の施設などでのボランティア活動や歌の発表に参加し、いろいろな方とご縁を深めている。
- ・税理士など3名のボランティアに支えられながら、2009年のセンター開設以来3名のスタッフで続けてきた。これからも気楽に相談できる関係づくりや困ったときにすぐに対応できる人間関係を当事者に伝えることによって「この地域でなら生きていける、自分たちのことを受け入れてくれる人がいる」と日々の安心感を提供していきたい。
- ・今後このような取り組みを強化していくためには、協力していただける企業や同じような活動をしている団体との横の連携、地域の中での縁を深めていきながら、それぞれの目指

すものが最終的に同じ形で市民の方々に届くチャンスを強化していきたいと願っている。

菅氏

- ・一般社団法人ソシオファンド北九州は、2014年6月に本業を持った社会人を中心に結成し、大学生を含む約20名のメンバーが活動に参加している。自分たちの本業で培った知識・スキル・経験を活かして、北九州市で地域課題の解決に取り組むNPOや社会起業家の支援を主に行っている。
- ・北九州に限らずNPOや社会起業家と呼ばれる方たちは増えてきてはいるが、経営が行き詰まり持続的な活動ができない団体が多いため、地域や社会の課題を解決しようと頑張っている人たちに何か手伝えることがあるのではと始めた活動である。東京にいた時に同様の活動をしている団体の活動に参加していたが、こういった活動は地方にこそ必要だと思い団体を設立した。
- ・私は、北九州市役所の職員であるが、他には会社員や経営者、税理士、司法書士、会計士といった士業の方、大学の教員など、かなりバラエティに富んだメンバーが集まっている。
- ・メンバーによる社会投資の実践、自分の時間、お金、専門知識、スキルを使ったお手伝いということで、資金提供と経営サポートをセットにした公募型投資共同プログラム「びびんこ」に取り組んでいる。「びびんこ」は、北九州の方言で「肩車」であり、我々はその肩車の下になって、社会企業家たちを下から支えるという意味合いで名付けた。メンバーが拠出した資金を基に最大50万円の資金提供とメンバーの専門性やスキルを活かした経営サポートを約1年間行っている。
- ・2015年と2016年に2団体ずつ支援し、今年新たに2団体の支援を行う。1団体につき5～8人程度のメンバーが固定で付き、2週間に1度ぐらいのペースで2～3時間のミーティングを行い、課題の解決策を見つけていく。次のミーティングまでにこういったことを考えておこうとそれぞれが宿題を持ち帰り、課題の解決に向けて取り組んでいる。
- ・具体的には、法人向けのパンフレットづくりやホームページの見直し、活動のマニュアルづくりなどを行ってきた。支援する団体は、広く公募をかけているが、我々のメンバーやお金に限りがあるため年間2団体が限界である。本来ならもっと支援できればと思っている。これまで、障害福祉や地域福祉、農業に関係する団体などを支援しており、分野は固定していないが、支援することで成果が見込まれる団体を選定している。
- ・もう1つの取り組みとして、誰もが社会投資を実践できる場づくりということで、地域課題解決ポータルサイト「LOCAL GOOD KITAQ」を運営している。「びびんこ」は私たちメンバーが直接、社会投資できる場だが、それよりもっと多くの方に社会投資に参加していただけたらと思い始めた取り組みである。このサイトでは、地域をよくする、我々は「ローカルグッド」と言っているが、いろんな人や団体、取り組みをニュースで情報発信し、資金獲得のためのクラウドファンディング、寄付を行えるようになっている。2015年5月にスタートしたが、140名から約100万円の資金提供があり、4つのプロジェクトが成立している。
- ・サイトだけでは見えないところでの社会投資になるので、顔の見える関係づくりのためのイベントも開催している。これまで6回イベントを開催し、約200名の参加があった。特

定の社会課題をテーマとして、関連する団体や学生から活動報告をしていただき、それに対して我々社会人として何ができるのかをディスカッションしている。今年からは、リアルな場を充実するため、イベントをなるべく1～2ヶ月に1回ぐらいのペースで実施したいと考えている。

- まだまだ3年目の団体であり、もっと活動を広げていくためにメンバーや応援してくれるサポーターを増やし、一般の方をどう巻き込んでいくかが課題である。最後に宣伝にはなるが、我々がパートナーと呼んでいる正会員と未来サポーターを募集している。正会員の年会費は10万円で、この10万円が団体を支援する資金やサイトの運営費にあてられている。

杉本氏

- 暮らしの保健室は、東京新宿区の戸山ハイツという古い都営ハイツの一角にできた相談室、誰でも気軽に訪れることのできるスペースということで、東京の新宿区で長く訪問看護ステーションを運営してこられた秋山正子さんが、厚生労働省の在宅医療連携拠点事業のモデル事業に平成23年に応募して採択され、その助成金を受けて開設したものである。
- 秋山氏は、長く訪問看護をしてきた中で、その家族や近所の方々が要介護とは言えないまでも生活の中でいろいろな問題を抱えていたり、東京は入院施設が少なく、大学病院でも3分診療と言われるような中で、たくさんの疑問を抱えたまま家に帰り、次の外来まで薬の飲み方も分からない状態など、医療上の困り事がたくさんあることに気付き、訪問看護では対応できないが、看護師として地域の中でそのような訴えや困りごとに対応することはできるのであるということではじめられたのがきっかけである。
- 戸山ハイツは、高齢化率51%、約3,000世帯のマンモス団地であり、誰もが気軽に訪れて、何を相談するでもなくお茶を飲みながら語る中で、その人自身の問題が紐解かれていくというプロセスを非常に大事にしているところである。
- 私は、そこで働いていたが、家庭の事情でこちらに移ることになった。その頃、暮らしの保健室がテレビ放映され、それを見ていたある方が訪ねて来られ、「両親が亡くなり実家が空き家になっているので、ぜひ地域に開かれた場所として使ってほしい」とおっしゃり、それが偶然、北九州市若松区だった。これもご縁かと思い、こちらに転入後、昨年10月から月2回、仲間とともに暮らしの保健室を始めた。
- 今年、ソシオファンドの協働プログラムに応募し、採択されたため、今後、継続していくための運営のやり方などいろいろなハウツーをソシオファンドの方々と共に学びながら組み立てていきたい。
- 集まった仲間は11名で、看護師・訪問看護師、ケアマネージャー、精神保健福祉士、介護福祉士、保健師と全員医療・介護の専門職種であり、ボランティアという形で月2回の運営を協働で行っている。2日間、地域の方々に気軽に来ていただき、お茶を飲みながら語らい、人と人とのふれあいを大事にしながら、地域をもう一度耕していきたい。
- 北九州市は、本当に病院の多いところで、「最期は家で」と思っている方が非常に多い。独居などいろんな事情もあると思うが、住み慣れたところで最期まで過ごしたいという思いを実現するためには、

地域の力が非常に大切であり、それを可能にする地域の醸成ということも念頭に置きながら、地域の方々をつないでいく役割も果たしていきたいと思っている。

- 仲間の中でミーティングを重ねているうちに、自分たち自身がそれぞれの職域の制約の中で、ここまでしかできないという介護や医療の仕事の限界に行き詰まり、疲弊していることに気づいた。その職域を飛び越えて、地域の中で専門職として金をいただくのではなく、隣人として地域の人間として自分たちの持っている知恵やアイデアを出して、この人にとって本当に必要な医療や介護は何かということと一緒に考えていく、そこに私たちのプロフェッショナルとしての生きがいややりがいを見出せるのではないかと考えている人が多いことが分かった。少し楽観的ではあるが、マンパワーとして呼びかければそのように考えている人がもっといるのではないかと期待をしている。
- 持続可能な運営に関しては、これから皆様方のご理解をいただきながら、あるいはソシオファンドの方々との協議を重ねながら、継続できる道を模索していきたい。地域包括ケアシステムはトップダウンで行うのではなく、それぞれの地域が抱える問題を地域の人たちが、どう考えどうつないでいけるか、共に歩むというボトムアップで実現していくことを念頭においている。
- 配付資料の取り組みの概要のプロセスは、ソシオファンドの方々と練りに練って、毎週のようにミーティングを重ねてつくっていただいたフォーマットにいろいろな思いを当て込んでできたものがある。若松でこのプロジェクトが成功すれば、北九州市がたくさん抱えている空き家を活用することにつながり、地域や行政にとってもプラスになるのではないかと考えている。
- 「住み慣れた地域で」と耳に聞こえのよい言葉はあるが、私たちはあえて「命を育み、守り、そして見送る社会」というふうにしていく。人間誰しも必ず最期を迎えるということを知りながら、日本人はそこに触れることが非常に弱くて、「最期まで在宅で、地域で」ということを考えずに生きている方もたくさんいる。「家でも大丈夫だ」という選択ができる、選択肢が増えることが大切であり、必ず訪れる命の最期を地域で「本当によかったね」と言ってみ送れるような社会にしていくことが、病院の多い北九州市だからこそ、考えていかなければならないと思う。
- 若松は、気質的なものもあって非常に地域の方が熱いが、自分の最期に関しては、人に迷惑をかけたくないという思いが強く、施設や病院を選ぶ方が多いようである。迷惑ではなく、お互い様と考えていけるような社会、「死」というものを忌み嫌うものではなく、必ず訪れるものとして自分の人生の延長線上にきちんと据えられるような、日常的にそういうことが語りあえるような「メメント・モリ カフェ」も開こうと思っている。
- 少し哲学的なことになるが、今まで蓋をしていたようなところにも、「どうしていったらいいのかわからないか」についてみんなで明るく楽しく語れるような、そういう文化もつくってほしいと思っている。
- 先日もこみねこハウスにご近所の85歳の独居の方が2人お友達を連れて来て、ぜんざいを囲みながら地域のような話を花を咲かせた。また、地域の方が眠っている立派なお雛様を持って来てくれ、階段に飾られている。大きな宣伝はせず、ポスティングを1回しただけだが、非常に幸先のよいスタートを切れたと思っている。

- ・これから少しずつ発信していきたい。現在北九州には、認知症カフェやサロンを開いているところがたくさんあると聞いているが、そういうところに私たちが出向いて行くことも可能だと思っているので、現在あるものといろいろな形でコラボしながらこの形が広がってほしいと願っているところである。

座長

- ・非常に興味深い3つの報告だった。3つの取り組みに質問のある方はしていただきたい。

構成員

- ・ソシオファンドの菅さんにお尋ねしたい。投資の資金は、会員の年会費10万円で拠出する形になっているが、継続性という点でどう考えているか。

菅氏

- ・10万円というのは、実際に運営するにあたってこれくらいが必要という逆算もあったが、10万円払ってやるのだったら「本腰を入れてやらないと」というようなある意味覚悟も含めてのところになる。利子を付けなくて元金だけ返していただくなどのやり方もあるかとは思っているが、貸金業法の関係もあって、将来的に何かしら選択肢を増やすことができれば、それはそれで我々の存在価値も高まるというふうに思っている。
- ・10万円払って、時間も使って何が楽しいんだとよく言われることがあるが、個人的には、普段仕事では出会わない人たちと真剣に議論をしながら真剣に考えることが、大変だけどすごく楽しいと思っている。また、自分では得られない知識や考え方が、日々話をしたり議論をしたりするなかで得られるので、団体としては「北九州をよくするため」と言っているが、私は趣味でやっている。他のメンバーも楽しいからやっているというのが本音である。

構成員

- ・覚悟を示すものでもあるし、趣味に10万円と考えれば、妥当かもしれない。

構成員

- ・ソシオバンクはこれまで4つの団体と協働してきたということだが、北九州のNPOや社会起業家の弱い面と強い面についてどう感じているか。

菅氏

- ・北九州に限らないが、人材と資金面が大きなハードルになっている。ボランティアベースで人を集めて活動しているところが多いが、それを継続的な活動にしていくために資金をどうするかを考えている団体が多い。
- ・しかし、資金よりも人が足りないところが多く、「こういうことをやりたいが、忙しすぎて手が付けられない」ということが多い。お金はいらないが、一緒にこの問題を解決してほしいという団体もあった。市や国の補助金など金額的にはもっと貰えるものがあると思う

が、我々に申し込んでいただいているところは、どちらかと言うとマンパワーや自分たちにはない知識やスキルを求めていると考えている。

構成員

- ・ソシオファン以外の2つの団体の財源は何か。
- ・暮らしの保健室は、看取りというところで医師との連携はどうなっているか。

杉本氏

- ・暮らしの保健室の財源はない。家主からは無償で提供いただいているが、光熱水費等々はお返ししたい。また、宣伝費等の運営費に関してもどう捻出していくか、これから考えていく。訪問看護ステーションの運営も可能だが、本末転倒にならないよう慎重に考えたい。
- ・医師との連携については、あくまで来られた方と一緒に話して、その方がどうしたいかを自分で決めていただく、決める力を見出せるまでお付き合いするというあり方を念頭に置いているため、近くの医療・介護機関を案内することはあるが、斡旋することはなく、緩やかにつながっているという立ち位置にいたいと思っています。

構成員

- ・ソシオファンは、暮らしの保健室の将来的な展望があって50万円ならと思って投資したのか。見返りは何もないのか。

菅氏

- ・事業の持続性や北九州に対するインパクトの大きさ、ビジネスモデルの面白さなどを見ながら選考させていただいている。こみねこハウスは、まだ全然ビジネスになっていない状況ではあったが、この仕組みが北九州にできるということが、将来的に大きなインパクトがあるのではないかとこの観点で協働先として選ばせていただいた。

構成員

- ・「高齢社会をよくする北九州女性の会」においても、看取りや空き家利用、シェアハウスに取り組んで30年ぐらい経つが、資金繰りのため映画会などをしながら何とかやっている状態である。本当に長く続けてほしいが、資金面が心配になって質問させていただいた。

田中氏

- ・ステップが25年前に市民活動の団体としてスタートした時は、不登校をテーマにしており、家族を単位とした会員制で年間4,000円を負担いただいた。会員が一番多い時で約200名だったが、さほど大きな金額にはなり得ない活動だった。
- ・子どもたちが安心して過ごせる場や一緒に考える場をつくることに主眼を置いており、お金がなければできないというものではなかった。お金がなくても市民の力を持ち寄って出来ることをやろう、できる人ができる時にできることを確実にやるというスローガンで長年やってきたので、お金がないことはあまり苦勞と思っていない。

- ・「ひきこもり地域支援センター」は市の設置である。全国で 2009 年から設置が開始され、現在、67箇所設置されている。北九州市も全国で17番目に設置に踏み出し、長年、不登校やひきこもりの若者の問題と向き合ってきたノウハウを運営に活かさないかとお声かけいただいた。3名のスタッフの人件費は、市からいただいている。

構成員

- ・ステップでは、現在不登校の子どもたちの支援をされているか。北九州市において不登校の子どもたちに対する公的、民間の支援はどのようなものがあるか。

田中氏

- ・不登校に関しては、子ども総合センターで18歳までの子どもを対象とした不登校の相談・支援を行っている。私どもは、そことすみ分けて18歳以上の方、上は60代ぐらいの幅広い年代の方に対応している。不登校に特化した民間の活動はあまり聞かないが、「KID's work」では、子どもの野外活動を中心に体験活動を頑張っている。

座長

- ・一旦ここで、取り組みの報告については終了させていただきたい。ここからは、今までの議論をまとめていく作業になるが、地域福祉計画の中の施策ごとの課題、強化すべき取り組みについて事務局でまとめたものをもとに議論いただきたい。

(事務局より資料4の説明)

構成員

- ・最終的なまとめの形も強化すべき取り組みに書いてあるような表現で列挙するような形になるのか。

事務局

- ・表現については、もう少し精査したい。

構成員

- ・場づくりや体制づくりという形でまとめられており、もう少し具体性がほしいが、地域福祉計画は他の計画と比べ、方向性を示すというところがある。例えばこんなイメージだという事例があれば、入れ込んでいただきたい。

構成員

- ・「高齢社会をよくする北九州女性の会」は配食活動を長年しており、75歳を超えた方たちが活動している。1週間に1回集まることが一種のサロンであり、いきがいを感じる場となっている。自分がサービスを受けてもいいような年齢の方が、他の方のお役に立てる生きがいがづくり、仕組みづくりがいいとずっと思っていた。

構成員

- ・子育ての相談や支援の窓口がワンストップになることや横断的になることは、とてもいい方向性だとは思いますが、窓口に行く親が受援力がなければ、子どもの困難さは埋もれてしまう。子ども自身が家庭や学校その他の教育機関で「あのね」と言えないのであれば、「あのね」と言える第3の居場所が必要ではないか。ステップもそのような場所だと思う。
- ・子ども食堂やプレイパーク、放課後の学習支援の場などがそのような場と言えるが、そこで子どもが評価されたり指導されたりすると、そこには行きづらくなり「あのね」とは言わないと思う。子どもがありのままに受け止められて、子どもたちから相談をしてもらえようような継続的な居場所づくりが必要であり、行政として支援する仕組みが今後必要ではないか。
- ・他の自治体では、暮らしの保健室に行政が補助をする仕組みや、そこで放課後の居場所づくりをしているところもあり、ぜひ北九州市も支援する方向で示していただきたい。その際、一斉に全区でやるのではなく、思いのある方たちがいて条件が揃えば、市が補助するような仕組みがよい。

構成員

- ・課題は、ほとんど出尽くしたという感じであるが、今までのスピードで取り組んでも遅い。いわゆる2025年問題、高齢化と世帯減が急激に進むため、もう少し我々も意識を強めていく必要がある。我々地域の自治会や社協も今までどおりにやっていくようなケースがまま見られるが、もう少し取り組みの密度を濃くしなければならない。
- ・意識の醸成や場づくりとあるが、講習会や研修会で一番強烈に残るのは、成功した地域の話聞き、交流することである。そこではじめて、自分たちのやっている方向やいろんなことに気づく。成功している地域とこれから頑張らないといけない地域の出会いをうまくコーディネートしていただきたい。

構成員

- ・人材育成の部分で、小中学校の福祉関係の学びや地域と大学の協働があるが、高等学校を入れていただきたい。高校生は多感な時期だが、受験教育に偏りがちである。こういう時こそ、福祉に触れる機会が必要であるが、高等学校の福祉に関する教育はまだ不十分だと思っている。

構成員

- ・福祉分野に進む学生が少なくなっており、大学の福祉学科もかなり厳しくなっている。ネガティブなイメージが全面に出過ぎているところがあり、それを変えられたらと常々思っている。

構成員

- ・スピード感を持って対策しないといけないが、人を育てるのは時間がかかる。小さい時か

ら福祉に向き合う教育をしておく、そういうものが脈々と続いて何十年か先には人材が育っていくのではないか。みんながそういう人材にならなくても、その中からリーダーになるべき存在が出てくると思うので、長い目で見た人材育成にポイントを置いた取り組みが重要である。

構成員

- ・「抱樸」では、年に約30回炊き出しを勝山公園で行っているが、以前はホームレスで炊き出しに並んでいた側だった人が、自立をして誰かを助ける側、ボランティアとして関わるケースが少なくない。人は、助けられる側だけにいるとしんどくなってくる。最初はありがたいと思うが、途中から申し訳ないというような気持ちになってくると思う。自分ができる時に誰かに手を貸したり、気づかったりできるようになると、自分が誰かの役に立っているという気持ちも出てくる。担い手側と受け手側の関係が固定するのではなく、変れるような社会になればと思っている。
- ・また、所属できる場所が1つではなくて、緩やかな関係の所属でもいいので複数あることがいい。人は1つの役割や1つの居場所しかないと苦しくなってくるものだと思う。所属できる場所が複数あるとそこでの役割もさまざまできる。所属できる場がお互いに連携し、緩やかに関わりあえるような場や仕組みがつくれるといい。

構成員

- ・介護保険制度が本当の地域福祉、福祉の心を崩していった気がしている。北九州にどのようなネットワークがあるのかも一度調べて、今のネットワークを壊すことなく、地域福祉を充実すべきである。まちの電気屋が、小さなこと、ニーズに対応しているが、地域はそういうような方が支えている。
- ・地域福祉を充実させていくのであれば、学校教育が重要である。また行政も専門職を入れるのか、3年で異動をするのか。変わらない施策が必要である。

構成員

- ・人材育成は、幼い時からの教育が非常に大切である。テレビのインタビューを見ると、東北や熊本の震災を経験した子どもたちが地域でどんなことをやっていくのかについてしっかりした受け答えをしており、自分の考えを持っていることに驚かされる。人間だれしも知識だけでは動けない、体験することが一番だと思う。子どもたちが一番変わるのは、体験すること、また世の中でどんなことがあっているのかそれを直接、またはビデオやテレビで見ることである。福祉に関する動画をたくさんつくって各学校に配信して、子どもたちと一緒に見るだけでも効果がある。
- ・子どもたちを変えるには、特別な場所を用意するのではなく、学校が地域福祉という観点を持って開かれた学校づくりを行い、地域や福祉の方ともっと意図的につながることを大事だと思う。
- ・本校では今年、社協・まち協・市民センターの方たちと「ふれあい給食」を始めた。行うのに3年かかったが、地域の方が学校に来てくださることで子どもへの関心が高まったり、

子どもたちは地域のおじさんやおばさんを知ることによって、普段から挨拶ができるようになったりと、こういう当たり前のことがやれる学校がいいなと思った。

- ・私が「ふれあい給食」をしようと思ったのは、ある学校で社協のウェルクラブが非常に活発で、その学校に赴任していた時に、ふれあい給食があったり、地域の人とリンゴの皮むきの作業があったり、昔遊びや七輪で火おこし体験してもらったりという成功した例を見てきたことがある。そういう成功している地域のことを、社協やまち協、自治会の方に知ってもらう機会を設け、それを地域に持ち帰ってもらえばいいと思う。
- ・自治会の中に意識の高い方々がいて、放課後に集会所で子供と勉強を一緒にしたり、碁を教えたりされている。開かれた学校づくりと大上段に構えなくても公民館や集会所を使うことで、子どもたちが地域と関わるという意識ができてくるのだと思う。

構成員

- ・ボランティアやリーダーの育成の話が出ているが、リーダーの存在が非常に重要だと思う。先月、仙台で災害時の女性リーダーの話聞いたが、ボランティアの動きとリーダーの動きは全く異なるとのことだった。ボランティア活動の中では決断を求められることは、ほとんどないが、リーダーになると求められる。ボランティアとボランティアリーダーというように並列に書かれているが、リーダーの育成を明確にうたっていく必要がある。
- ・先ほど話のあったスピード感ということ考えた時、スピード感を持っている地域には強烈なリーダーシップを発揮する方がおり、さまざまな活動につながっている部分があると思うので、リーダー育成についてももう少し強調してもいいのではないかな。

構成員

- ・市民センターの借り手が多く、それ以上の活用が難しい地域においては、空き家を活用すればいいのでは。
- ・人材育成の中に高校生を入れてほしい。昔、地域で高校生のボランティア活動を組織したことがあったが、帰りの時間が不規則で継続が難しかった。しかし、茶髪でギターを弾いていた子がボランティア経験をもとに障害者施設に就職した。経験することは大切だと思う。

構成員

- ・課題として、近所に住んでいて顔があまり分らないとか、関わりがないとか、困りごとが分らないという部分があり、その対応として向こう三軒両隣でお互いに近況を共有するとあるが、今の時代、そこまでいけるのか疑問である。
- ・校区社協のふれあいネットワークや連絡調整会議に暮らしの保健室などの福祉の専門の方々に関わっていただくことで課題解決していければ、地域の活動者がやりがいを感じることができると思うので、地域と専門職との協働についてぜひ進めていきたい。

構成員

- ・障害のある方が他の障害種別の方の手伝いをしたり、支援をする側にまわることはよくあ

るし、今の時代1人の人間が1つの役割だけで生きることはないと思うので、支援を受ける側の方が支援をする側にまわるための取り組みや場づくりが必要である。

- ・仕事として地域との関わりはあるが、自分のように夫婦だけで子どもがいない世帯だと自分が住んでいる地域との接点の持ち方がなかなか難しい。今日の話にあったように、自ら持っている力やノウハウをどう使っていくか、職域の制限の中で辟易することや、仕事では出会えない方と出会う接点というところを日々感じており、土日プライベートな時間やお金、労力をかけて個人的な活動をしている。しかし、会社と家庭の往復だけで力尽きている私たち世代もいると思う。
- ・何か地域に貢献したいと思ってもどう接点を持ったらいいか分からない人や、地域の町内会活動に一度参加するとなかなか抜けられない、若いのだからこれもあれもと押しつけられる、次の人を見つけてからでないと辞められないなど、いろんな経験をしてくると「もう二度と関わりたくない」となる人もいる。
- ・しかし、家庭と仕事以外の第三の場はどんな方にも必要だと思っており、困難を抱える人への支援策はもちろん、支援者が支援をし続けるための支援者同士のつながりが必要である。生活の困難さを抱えている人に関わっている人たち同士が燃え尽きずに、立場に応じた地域との接点を持てるような場やきっかけづくり、継続的に参加できる仕組みは、行政の介入によりできるのではないか。
- ・高校生の福祉への関わりが大事という話もあったが、自分自身も高校の時に交換留学で県外の養護学校と交流したことが、福祉に携わるきっかけになった。

田中氏

- ・やはり大人が楽しんで見せないと子どもは楽しくないと思う。不登校の子どもや社会に出ていけない、人が怖いと言っている若者と話をしていると、これまで過ごしてきた自分の人生を反省させられることが多々あった。子どもたちの苦しさから学ぶことが私の仕事になったし、ひきこもって部屋から出てこなかった若者が、今スタッフの1人として私を支えてくれている。
- ・人が育つのは、ものすごく時間がかかる。私たちは、それぞれの育ちのスピードを無視して一律にこのようになれと言ってきたのではないか。子どもや若者には地域に愛された体験、無条件に愛される体験が重要であり、私たちが伝える最も大きなことではないかと思う。病気になることや障害を持つことが悪いわけではないし、違うスピードで歩くことが悪いわけでもない。「自分1人ではなく様々な人とつながっていれば、自分の人生に辿りつける方法が何か見えてくるよ」、「人生に悪戦苦闘をしながら、今、皆さんのおかげでありがたいことを仕事にさせていただいているよ」ということを伝えていく中で、若い人が社会に対しての希望を失わずに、このひきこもりの体験をただ不幸な体験で終わらせる必要はないんだと思えるだろう。
- ・行政にお願いすることは、さほど多くはない。本当に皆さん一生懸命心を砕いてやっている。縁が輪ネットの60名のメンバーの中には公務員もいる。仕事と家庭だけでは燃え尽きてしまいがちな大変なお仕事を担っているのだから、「楽しみましょう」と。どの仕事の中でも楽しめる部分を私たちが持っていて、「この仕事は苦勞するけれどここが楽しい

んだ」と若い方々に伝えていく。

- ・「大変だぞ、社会は厳しいんだぞ」ということは言わなくても伝わっているので、どう楽しめるか、「生きていくことにどんな意味があると自分は思っている」ということを伝えられることが福祉そのもので、そうすることで若者は社会参加の夢を失わずに頑張ろうと思ってくれるのではないか。
- ・昔、何もなかった時代を改めて振り返ると、地域の方に「どうしたんね、今日は遅くまで外におるね」、「お母さんが仕事が忙しいんやったら、うちでご飯食べんね」と声をかけてもらったり、「あんたどこ昨日ケンカしよったやろ」と筒抜けになっただけで、お互いがお互いを支え合う関係が自然にあった。モノやシステムがない中で生きてこれたのは、そういう人の思いがつながっていたせいではないだろうか。暑い時に萱の中でちょっと寝返りをうったらどこからか風がくる。何で風がくるんだらうと思うと、隣に寝ているおばあちゃんがうちわであおいでくれていた。おばあちゃんいつ寝ているんだらうとその頃思ったが、あの不便さこそが気持ちを伝えやすい状況でもあった。便利になりすぎるのが子どもたちに伝え感じられる手段を奪ってしまっていると思う。
- ・まだ経験が脳裏に思い出として残っている私たちの年代が、どのように楽しみながら伝えられるかにかかっている。お金では伝わらないものが、今孤立しながら何とか生き延びようとしている方々との出会いの中にたくさんヒントがあると思う。私たちの学ぶべきは、今苦しんでおられる方々の姿勢から何を私たちが自分の問題として受け止め、行政の方々と一緒にどう切り開いていけるかということではないか。

構成員

- ・私は仕事柄、自分の住んでいる地域の活動になるべく参加するようにはしているが、同じ現役世代の人に話を聞いても、やはり参加できてない人が多い。何かやらなきゃいけないという意識はみんな持っているが、参加してしまうと抜けられないんじゃないか、役員を押し付けられるんじゃないかと、自分にストップをかけてしまうことが多々あると思う。
- ・だから、地域活動に参加できるきっかけづくりとして「ちょいボラ」、気軽にできるボランティアについて盛り込んでいただきたい。例えば、地域のお祭りの手伝いにしても9時から11時の2時間ぐらいだったら活動できるという人もいるため、そういった方々が参加しやすくなる環境づくりが重要である。

以上